

国生み神話の復元

柴山鳥人

古事記のイザナミの国生み神話の復元を起点にして大倭国の歴史は復元できる。

目 次

1の01	偽物の国生み神話	1
1の02	イザナキとイザナミ	3
1の03	三柱の貴い神と倭面土国	4
1の04	沖ノ三柱女島と伊都ノ二柱女島	6
1の05	淡海の多賀と内海の志賀	7
1の06	本物の国生み神話	9

1の01 偽物の国生み神話

国生み神話を知っていますか。

イザナキとイザナミの男女二柱の神が、淡路、四国、隠岐、九州、壱岐、対馬、佐渡、本州の順に八つの島を生み成す話です。この話には規則性や法則性はなく、美しさがありません。

この話は本物なのでしょうか。

明らかに疑わしいのは二番目に生まれる四国です。

伊予の二名島が四国と解釈されていますが、四国ならば伊予の四名島になるはずです。伊予の二名島は、四国である伊予島と淡路島を指す伊予の二島からの誤りではないかと想像してみました。

そうだとすると、初めに生まれる淡路島と解釈されている淡道の穂の狭別島は淡路島ではないこととなります。

本物の淡道の穂の狭別島を探してみます。

四国が讃岐島でも阿波島でも土佐島でもなく、伊予島とされています。国生みの話は伊予の国に向かいあっている九州北部か中国西部でつくられているのではないのでしょうか。

漢字の意味のとおり「淡」をかすかな、「穂」をやり・刀などの先として解釈してみます。そうすると、かすかな道の先の狭く別れた島との意味になります。かすかな道を存在が確かでなく無くなってしまうこともある満潮時には海中に沈み干潮時には現れる道と、そして狭く別れた島を少しだけ離れた島としてみましょう。

九州北部か中国西部の満潮時には海中に沈み、干潮時には現れる道の先から少しだけ離れた島として見つけたのは九州北部、博多湾、海の中道の先から少し離れた島、志賀島（しかのしま）です。淡道は海（わた）道だったのかもしれませんが。少しだけ離れた島との意味の狭別島（さわけしま）から近島（ちかのしま）となり志賀島になったのかもしれませんが。

最初に生まれた島が志賀島だとすると、次に生まれる島が伊予の二島である四国と淡路島では離れすぎで大きすぎです。

志賀島の近くで相応しい島を探してみます。志賀島の近くにある能古島に注目しました。能古島は筑前国伊都郡（いとのこおり）の近くにあります。

能古島を含む伊都郡の二つの島が伊都の二島で、これを伊予の二島に誤ってしまったのではないのでしょうか。

次に生む隠岐三つ子島も志賀島、能古島に近い場所で探してみます。

海の正倉院として有名な沖ノ島があります。

沖ノ島を含む三つの島が沖ノ三つの島ではないのでしょうか。

次に四面の筑紫島である九州、その次に壱岐、対馬、佐渡、本州、最後に六小島が生まれます。

ここまで一島、二島、三島、四面の筑紫島ときて壱岐、対馬、佐渡、本州の四島になります。また、四面の筑紫島と六小島の間には四島があります。四島は五島だったのではないのでしょうか。神話創造のときには認知されていなかったと思われる佐渡を外して、その代わりに二番目に生まれた島を伊都の二島としたことで無くなってしまった伊予の二島を加えます。

そうすると、壱岐、対馬、伊予の二島、本州の五島となります。

本物の国生みの神話は、海の中道の先から少しだけ離れた「志賀島」から始まり、伊都郡の能古島を含む「伊都の二島」、沖ノ島を含む「沖ノ三つの島」、「四面の筑紫島」である九州、「壱岐、対馬、伊予の二島、本州の五島」、そして最後に「六小島」が生まれる、波紋のように広がってゆく美しい話だったのではないのでしょうか。

1の02 イザナキとイザナミ

規則性と法則性を持ち波紋のように広がってゆく美しい神話が、なぜ偽の話、オカシナ話にすり替えられてしまったのでしょうか。

原因として考えられるのは東征です。

東征が実際にあって海の中道や伊都郡を知らない後世の畿内の人により九州北部から畿内へ、国生み神話の起点が替えられてしまったのではないのでしょうか。

私は今まで古事記は美的な感覚も合理的な思考も持ち合わせていない古代の人の作り話だと思い込んでいました。

しかし、このような美しい国生み神話を古代の人が創造していたのなら、この先入観は改めざるをえません。古事記は、古代の人から語り継がれてきた物語を後世の人が理解できずに改変してしまった歴史書なのかもしれません。

まずは、東征前の古事記上巻を、九州北部を舞台とする史実を反映した話だとして解説してみます。

『イザナキとイザナミの二柱の神は、ミトノマグワヒをして国を生もうとします。

イザナミが主導してうまく事が運ばず、イザナキが主導してようやく国を生み終えます。

その後さらに神々を生み、火の神を生んだためイザナミは死んでしまい、出雲の国と伯耆の国との境の比婆の山に葬られます。

イザナキはイザナミをひと目見ようと黄泉の国へと行きます。

しかし、見ないでと言われたにもかかわらずイザナキはイザナミの姿を見てしまい、その醜い姿におそろしくなり逃げ出します。

恥をかかされイザナミは追いかけますが、イザナキは大岩で道を塞いで逃げ切り、やっとのことで葦原の中つ国に戻ります。』

イザナミを祀る神社が九州北部にあります。筑前国早良郡（さわらのこおり）飯盛山の

飯盛神社です。

神社の東に吉武高木遺跡があります。吉武高木遺跡は、早良平野を北へ流れる室見川の中流域にある吉武遺跡群の一つで、三種の神器の鏡・玉・剣が揃って見つかった木棺墓があり、最古の王墓と呼ばれることもあるそうです。

イザナキを祀る神社には、筑前国糟屋郡太祖山の太祖神社があります。

イザナキが戻ってきた葦原の中つ国はどこにあるのでしょうか。古語の「つ」は所属の意を表し連体修飾語をつくる格助詞です。現代語の「の」と同じです。中の国だとすると筑前国那珂郡（なかのこおり）のことではないでしょうか。比恵・那珂遺跡などの重要な遺跡がいくつもあります。

そうすると、イザナミと関係のある早良郡を中心とする集団からイザナキと関係のある糟屋郡・那珂郡を中心とする集団への権力の移行を反映していると想像できます。

想像を膨らませてみましょう。吉武高木遺跡を中心とする早良国と比恵・那珂遺跡を中心とする那珂国とは協力関係にあり早良国が主導権を握っています。しかし、しだいに那珂国が力をつけてきます。早良国は那珂国に火攻めされ、残存勢力が反撃したものの撃退されて滅んだのではないかと妄想してみます。

1の03 三柱の貴い神と倭面土国

『葦原の中つ国に戻ったイザナキは、筑紫の日向の橘の小門の阿波岐の原に出向き禊を行い神々が生まれます。禊の果てに左目からアマテラス、右目からツキヨミ、つぎに鼻からスサノオが生まれます。』

大陸の歴史書である後漢書に、西暦107年、倭国王帥升らが生口160人を後漢の安帝におくったとの記載があり、この倭国王は、中国のほかの本には倭面土国王などと書いてあるそうです。この倭国・倭面土国が大倭国（やまとのくに）の起源だとしたら、倭面土国とされている理由はこの古事記の記載と関連があるのではないのでしょうか。

面土国は漢字の意味のとおり、人の顔の土地の国を意味し、左目からアマテラス、右目からツキヨミ、鼻からスサノオが生まれた国を表しているとしてみましょう。

左目から成り出でたのはアマテラスです。大倭国は天照らす太陽、日の神である天照大神を最高神として祀っています。

右目から成り出でるツキヨミが何を指すのか分かりません。

鼻から成り出でたスサノオは、古事記上巻に何度も登場します。後に大国主と尊称されるオホナムチが、スサノオの6世孫でありながらスサノオの娘を妻としているオカシナ関係に注目しました。オホナムチは初代スサノオの傍系の6世孫で、直系の数代目スサノオの娘を娶り後に大国主となったと解釈してみます。つまり、スサノオは特定の人名ではなく、スサノオウ、荒ノ王との王の尊称ではないでしょうか。

大倭国は大王が治める国です。大王（おおきみ）との尊称が使われる前に、荒ノ王との尊称があったと考えてみます。

筑前国御笠郡の筑紫神社には、その昔筑前と筑後の境に荒ぶる神がいて、往来の人々の半数を殺してしまったとの話が伝わっています。

荒ぶる神の正体は、徴用した人々の半数が亡くなってしまう程の激しい争いを行った荒ぶる王、荒ノ王、大王なのです。

もう一度、ツキヨミに注目してみます。

アマテラスが日の神、天照大神であり、スサノオが荒ノ王、荒ぶる王、大王だとするならば、ツキヨミも神や王と同等の者のはずです。そうすると、ツキヨミの正体はツキヨミこ（月夜巫女）、イツキヨミこ（斎月夜巫女）、イツキのみこ（斎の巫女）、イツキのみや（斎の宮）ではないでしょうか。

古事記から推理すると大倭国の起源である倭国の使者が、イザナギの左目から出でた天照らす日の神を、右目から出でた斎の巫女が祀り、鼻から出でた荒ノ王が青人草を治める国と倭国を漢の人に紹介したことが、倭面土国とされた原因ではないでしょうか。

さて、古事記では、大王ミマキイリヒコイニエ（10代崇神）の娘トヨスキイリヒメが伊勢の斎宮の初出で、始まりとされています。

これは伊勢の斎宮の始まりのことであり、斎宮の始まりは禊の果てからで、ツキヨミとスサノオ、斎宮と大王が揃って大倭国が始まったのではないのでしょうか。

伊勢の斎宮の始まりとは東征により斎宮が伊勢に移り始まったことで、東征を実施して斎宮を九州北部から伊勢に移したのはトヨスキの父イニエ（10代崇神）ではないかとの疑いが生じます。

1の04 沖ノ三柱女島と伊都ノ二柱女島

『イザナキは禊の果てに三柱の貴い神を生み成し、アマテラスに高天の原、ツキヨミに夜の食国、そしてスサノオに海原を委ねます。

しかし、スサノオは海原を治めようとせず亡き母の国である根の堅州の国に行きたいと願うイザナキに追放されてしまいます。(以下、スサノオの神逐1とします)

スサノオは亡き母の国に行く暇乞いをしようとして、アマテラスの治める高天の原に上り、スサノオを疑うアマテラスと誓約(ウケヒ)を行います。

アマテラスとスサノオの誓約では、アマテラスがスサノオの剣を取って三つに折り口に入れ吹き出し、タキリヒメ、イチキシマヒメ、タキツヒメの三柱の女の神が成されます。

タキリヒメは奥津宮、イチキシマヒメは中津宮、タキツヒメは辺津宮に座す宗像の三神のこととされています。

奥津宮は沖ノ島に、中津宮は大島に、そして辺津宮は宗像市田島に祀られています。』

三柱の女の神、宗像の三神の話は、本物の国生み神話で沖ノ島を含む3島とした「沖ノ三つの島」のことではないでしょうか。

隠岐三つ子島(おきのみつごのしま)は、沖ノ島、大島、田島のタキリヒメ、イチキシマヒメ、タキツヒメの沖ノ三柱女島(おきのみつめしま)のことだったのです。

復元した国生み神話の沖ノ三つの島の話が古事記にあります。

そうすると、その前にある伊都郡の能古島を含む伊都の二島の話も古事記にあるかもしれません。伊都郡に痕跡をさがしてみます。

糸島市の三雲南小路遺跡の近くにある細石(さざれいし)神社はイハナガヒメとコノハナサクヤヒメの二柱の女神を祀っています。

古事記にこの二柱の女神が登場する話があります。

『ニギがオオヤマツミに娘のコノハナサクヤヒメを妻にと乞うたところ、姉の醜いイワナガヒメも嫁いできます。

ニギはイワナガヒメを畏れて親元に送り返し、コノハナサクヤヒメだけを留めて契りを交わします。』

この二柱の女神と能古島を含む伊都の二島に関連があるのではないのでしょうか。

ニギが返さずに残したコノハナサクヤ姫が残島であり能古島になったと推測します。

もしくはコノハナ島がコノ島、ノコ島になったのかもしれませんが。

親元におくり返されたイワナガ姫は、陸と繋がる島である陸繋島を指していて現在の毘沙門山と浜崎山が一つの島で岩長島だったのではないのでしょうか。毘沙門山北面には、柱状節理と言われる、冷えて固まるときに柱状になった岩石があります。そのために岩長島と呼ばれていたのです。

ニニギの妻のコノハナサクヤヒメとその姉イワナガヒメの話は、残島と岩長島の伊都の二柱女島（いとのかたつめじま）の話だったのです。

細石神社がイハナガヒメとコノハナサクヤヒメを祀っていることから、三雲南小路遺跡に埋葬されているのはニニギでしょう。

前漢王朝から下賜されたとされる大型の鏡が出土されていることから、ニニギは前漢のあった紀元前2世紀から紀元前1世紀ごろの人物です。前漢書に朝鮮半島の「楽浪郡の海中に、倭人がいる。分れて百余国となる。一年のおりおりに漢に使者をおくってきた」と書かれています。

ニニギは前漢と密接な関係を築いた伊都郡を支配した王だったのです。

1の05 淡海の多賀と内海の志賀

沖ノ三柱女島、伊都の二柱女島の話があるなら、淡道の穂の狭別島である志賀島の話もあるはずです。

『スサノオが海原を治めようとせずイザナキに追放されます。イザナキは淡海の多賀で身を隠します。』との古事記の記載に注目しました。淡海は波のかすかな穏やかな海、内海の博多湾だと推測できます。しかし、多賀の適地は見つかりません。淡海の多賀は志賀島のこと、淡道の穂の狭別島の話ではないのでしょうか。イザナキが身を隠したのが志賀島ならば、イザナキは志賀島を拠点とした海の支配者であったと推測できます。

イザナキは、協力関係にあった陸の吉武高木遺跡を中心としたイザナミの国を滅ぼし、天照らす日の神をツキヨミが祀り、スサノオが人を治める国を伊都郡に創り、葦原の中つ国の那珂郡も支配したと推測します。

大倭国の起源と推測した倭面土国以前の倭に関する大陸の歴史書をみてみましょう。後漢書には「倭は、韓（朝鮮）の東南海上にある。山島によって住んでいる。およそ百余国

ある。漢の武帝が朝鮮を滅ぼしてから、使者をおくってくるのは、三十ばかりの国だ」とあり、ついで、「建武中元二年（西暦57年）、倭奴国（わのなのくに）が、貢をもってきた。使者は自分を大夫だといった。倭国の南の端である。光武帝は、印綬（印とひも）を賜った」と書いてあるそうです。

イザナミの国の跡と推定した吉武高木遺跡からヒスイが見つかっています。越後国糸魚川から産出されたヒスイとされています。早良郡から糸魚川に至る日本海に沿った海上交易路があったはずで、筑前・長門・石見・出雲・伯耆・因幡・但馬・丹後・若狭・越前・加賀・能登・越中・越後に港があり、港を中心に小さな国々が発展していたのでしょう。

倭奴国の所在地は、筑前国の那珂郡だと推測されています。後漢に使者をおくっている日本海に沿った三十ばかりの国の中で南の端にあたります。

漢委奴国王という5字が刻みこまれた金印が、志賀島から見つかっています。

西暦57年に光武帝から倭奴国の使者に下賜された印でしょう。漢委奴国王は、漢が後ろ盾となっている委奴国の王との意味です。使者の大夫の倭奴国である那珂郡が、委奴国である伊都郡（いとこのおり）に服属する国の一つだったのではないのでしょうか。

後漢から金印を下賜された委奴国王は、前漢と良好な関係を築いていた筑前国伊都郡のニニギの子孫の伊都国王であり、那珂国をも支配する王なのです。

この印は漢の認める王の証ですから漢が滅亡するまで利用価値があります。

漢、後漢は西暦189年以後統治機能を喪失し、西暦220年に滅亡します。所持する意味が無くなり志賀島に丁重に埋めたと想像します。

金印を下賜された伊都国王の子孫は、古事記の国生み神話の基となる話を知っていて、淡道の穂の狭別島である志賀島が神話で最初に生まれる島であり、祖先のイザナキが身を隠した聖なる島であるため金印を埋設するのに最適な場所と考えたのでしょう。

大倭国に繋がっていく委奴国王の子孫は、漢が認知する王の印（しるし）である金印を漢の滅亡後に志賀島に埋めたと推測します。

そして、そうだとすると、それは東征の前のはずです。東征後であれば金印は畿内に運ばれ畿内に埋設されたはずで、

後漢の滅亡のときには東征はまだ行われていないのです。

1の06 本物の国生み神話

東征前の九州北部から始まる本物の国生み神話を改めて復元してみましょう。

オノゴロ島	玄界灘上の離島の小呂島（オノロシマ）
骨なしのヒルコ	満潮時も干潮時も海に沈んでいる浅瀬
アワ島	満潮時には沈み干潮時には姿を現す浅瀬
淡道の穂の狭別島	海ノ中道の先の近島（現在の志賀島）
伊都の二柱女島	残島（現在の能古島）、岩長島（現在の毘沙門山と浜崎山）
沖ノ三柱女島	沖ノ島、大島、田島
四面の筑紫島	白日別、豊日別、タケヒムカトヨクシヒネ別、建日別
五小島	神集島、姫島、玄界島、相島、楯崎島

近島が陸と少し離れた島、伊都の二柱女島の二島目の岩長島は陸と繋がった島、沖ノ三柱女島の三島目の田島は陸にあります。段階的に進んでゆくこの話には躍動感があります。

東征前の国生み神話は、四面の筑紫島の後、五島・六小島と続くのではなく五小島で終わっていたと推測します。

九州北部の倭奴国のその後の領土拡張を反映させて東征後に五小島が、壱岐、対馬、伊予島と淡島、本州の五島に置き換えられたのではないのでしょうか。

筑前国周辺の五小島はほぼ直線上にある島で、国産みの最後に、使ったアメノヌボコを振り払い、五つの滴が落ちて小島になったとの話で国生みの話は終わっていたのではないかと妄想します。

また、この復元した国生み神話には、淡道の穂の狭別島、伊都の二柱女島、三面の筑紫島、四小島との話の原型があったのかもしれませんが。三面の筑紫島は伊都郡・早良郡・那珂郡若しくは志摩郡の三つの郡、或いはアマテラス・ツキヨミ・スサノオの三面の面土国のことを指すと推測します。

なお、沖ノ三柱女島の田島には宗像神社があります。宗像神社は五小島の延長線上でもあります。淡道の穂の狭別島（現在の志賀島）と伊都の二柱女島の残島（現在の能古島）の延長線上に飯盛神社があります。宗像神社と飯盛神社にはなんらかの関連があったのではないかと推測します。

筑紫島の四面についても解説してみましよう。

『筑紫島には四つの面があり、面ごとに名があります。

筑紫の国は白日別、豊の国は豊日別、肥の国はタケヒムカヒトヨクシヒネワケ、熊曾の国は建日別』とされています。

筑紫島の筑紫の国、白日別は、治める・占めるとの意味があった古語の知る・領るから領らひ別、治める地域、大倭国の基となる国の支配地を指しています。

肥の国は建日向日豊久士比泥別の比泥別（ひねわけ）から変化したのでしょうか。

どんな意味なのでしょうか。

ここでもいくつかの漢字に意味があると考えます。

建日向ひ豊くしひ泥別として、建日は建日別を指し、向ひは向かい合っている前のほう、豊は豊かな、くしひは希しいでごく少ない・珍しい・希な、泥は土のドロのこととすると、建日別に向かい合っている豊かでまねな泥の別と解釈できます。

後半の豊かでまねな泥の別は、よく肥えた土壌の区域との肥の国の説明です。

前半は位置を説明しています。肥の国は建日別に向かい合っています。肥の国の川である現在の筑後川を挟んで北が後に肥前国となる肥の国で、南が後に筑後国となる建日別を指しています。建日別である筑後国以南は熊襲の国で、筑前国である白日別の支配が及ばない猛々しい熊曾の地で、後に北から筑後国、肥後国と領土を拡大して行ったのでしょうか。

全体は、建日・豊・久士、との肥の国を除く筑紫島の四面のうちの三面の名称を使って肥の国を説明する日本語で確認できる最古の言葉遊びです。

なお、筑紫は久士と略されていることから筑紫（ちく・し）ではなく、千希し（ち・くし）が地名の由来であり、とても稀で貴い、すばらしい土地との意味でしょう。

【著者の出版物】

アマテラスひといツキヨミことスサノオウ

国生み神話の復元を起点に古事記と日本書紀から復元した大倭国の始まり

著者 柴山 鳥人

アマゾン電子書籍 kindle 版 397 円 (kindleunlimited 対象)

オンデマンド（ペーパーバック）1,234 円